13
2796

筆耕式篇

伊勢音頭恋寐刃自序

伊勢音頭は。古原の僕本の継まる女郎花づらと名ある夫松などと

今もうたふ。いまより今に踊の手振更なり古雅の遺風

ありて優に艶なるもの諸国の頌歌によつて並ざる事ぞ努ふ

宜頭にあけて姫路の後生涯の人好とするは継興によつて此より亭

一と抜く糸宮の新古市なる千束屋の鼓の間とひふ所に社飲を得て

倶に魂を踊せらる。是よつ出て傍の人同じやうるなり。昔此を耳に定

眼に踊る紙入て彼帖にしるしおかりしが今稿に編集しぬ

どうあへず伊勢音頭恋の手踊と名づくものなし

文化癸酉孟春

東都

十返舎一九誌

古市千束屋樓上踊之圖

一念五百生
繋念
天量劫

下
伊勢おんど

下之巻

佐
み

文化十酉年春月新板

十返舍一九作

墨亭月麻呂画

板元山口屋